

鑑真記念「逆渡航日中青年交流計画」の成果

——交流体験学生31名が日中の架け橋を決意——

小 野 豊 和

目 次

はじめに

1. なぜ、今、鑑真なのか？
2. プロジェクトの発足
3. 参加学生の全国公募
4. 参加学生に与えた“一人一役”
5. 国際交流基金などに資金助成を要請
6. 中国の旅と訪問大学における日中青年交流
7. 最終課題に夢を託して
8. 総括

はじめに

日中国交回復35周年の記念となる2007年の秋、鑑真プロジェクトの一つの種が早大中国塾（代表：木下俊彦）という大地に蒔かれた。日本と中国に関心を持つ学識経験者、実業の世界で働く産業人、コンサルタント、日本に來ている中国の留学生、そして、日本人学生たちが、形式にとらわれない自由な議論を通じて、新たな知見を求め、政冷経熱といわれる現下の日中関係に“友好交流”という燈明を見出そうとする活動が始まったのである。

日中関係は？ と問うと、政冷経熱の状態が続いていることもあり、現代に生きる多くの人は昭和の戦争を想起し、その関係の修復にはまだなお時間がかかると思い、長い歴史を遡ることを忘れていないのではないか。このような日中関係の中で2008年5月の胡錦濤国家主席の訪日は、この狭い了見を目覚めさせる効果があった。勿論、戦争と言う名の下での日本の中国進出は一億総懺悔をしても許されるものではないが、1200年以上も前から日本と中国大陆は一衣帯水の関係で相互に人の交流があり、長きに渡る友好関係にあったこと東海大学紀要政治経済学部 第41号（2009）

とを思い起こすと、むしろ世界の中でも稀有な関係が続いたと誇りにすら思えるのである。

唐の時代に鑑真和上が国禁を犯して、5度の失敗にもめげず6度目に日本に上陸した。仏教の戒律のみならず、当時最新の行政、司法、立法に関する情報、また文化芸術、医療、建築様式などが日本にもたらされた。鑑真渡日を遡る150年前に、聖徳太子は「和を以て貴しと為す」という基本理念を提唱したように、わが日本の政策は、この時代から「和」を尊重する国柄となったのである。しかし、為政者は時として、この尊い基本精神を忘れるものである。世の東西を問わずこの傾向が世界を紛争の地と化していったのである。

中国社会科学院 OB の王和氏¹⁾は「日中関係の問題を解決するには、大局を考慮しなければならない。大局とは何か？ それは、日中両国が今日の現実の中で、友好的につきあい、「和」を保たなければならないということだ。「和」はお互いを利するが、「闘」はお互いを損なう。だから、日中両国の政治家、企業家、学者、文化人、特にメディアに従事する文化人は、両国の歴史を全面的に反映し、両国人民の友好を利するようなことをたくさんやるべきだ。日中の民間人たちはさらに、確実に両国人民の交流往来を促進する事業を今以上に多く手がけるべきだ」と述べている。

21世紀を迎え、胡錦濤国家主席が提唱する“和諧社会”は、格差是正と階層を超えたコミュニケーションによって国家の平和と安定を目指そうというものであろうが、中国のグローバルゼーションを考えると、この考えは国を越えても立派に通用する考えと言える。今回のプロジェクトには、日本全国から選ばれた志ある30名の学生が参加した。日中青少年交流年における政府間事業では4000人の日本の若者が中国を訪れたが、それは日中双方で用意された企画に沿った活動で、そのこと自体に意味はあるが、われわれが心血を注いで手造りで進めた活動とは比べ物にならないだろう。

鑑真プロジェクトに参加した日本の若者は、まず「日中関係改善に向けて私がしたいこと」という自問自答から始まった。作文審査に合格した学生は、奈良事前一泊研修で同志となった。若者には無限の可能性があり、その潜在能力を発揮させるのは先人の務めではなかろうか。大人は、「今の若者は？」と、その行動・思考方式に疑問を持ち、はじめから蔑視する傾向があるが、今回参加した学生たちには日中友好という志があった。素直で、中国から貪欲に学ぼうという意欲拔群で、相互扶助の精神にも長けていた。大阪から上海までの48時間の逆行の船旅で彼らは大いに変化していった。彼らの心には、まさに大和朝廷の命を受け、鑑真に渡日要請をするため唐に渡る栄勲、普照が抱いた使命感と不安が入り混じっていたように感じた。

しかし、上海に上陸し、鑑真ゆかりの寧波地区の大明寺、阿育王寺などの訪問を通じ

て、鑑真の不撓不屈の精神の原点を肌で感じたことだろう。そして、21世紀に日本から中国を訪れた使者は4つの大学との交流によって大いに刺激を受けた。語学堪能で強烈な自己主張をする中国の現代の若者の存在、そして、過去を遡ることは置いておいて、未来志向で友情を確かめ合おうとする彼らの姿に誰もが心を打たれた。かつて、孔子は「朋ありて遠方より来る。また愉しからずや」と論語で説いているように、一衣帯水の東シナ海を渡って訪れた日本の若者を心から歓迎し、胸襟を開いてくれたのである。

1. なぜ、今、鑑真なのか？

1-1. 鑑真は日中共通の尊敬すべき人物

日本では、大和朝廷の命を受けて鑑真に渡日を要請するために唐に渡った僧、栄叡、普照の物語を書いた井上靖の小説『天平の薨』がよく読まれている。また、奈良の唐招提寺に修学旅行で訪れたものも多く、鑑真を知らない人はいないと言ってもいい。一方、中国でも、人民教育出版社発行の全日制普通高級中学教科書『中国の歴史』の第4章「封建社会の繁栄」の中に「日本との友好関係」という見出しの後に鑑真について記述があり、「不撓不屈の精神で6回目にやっと渡日に成功し、日本の仏教に重要な役割を果たし、数多くの薬物鑑別法を日本に招来した」などと書かれている。2008年には、中日国交正常化35周年特別記念事業として、中国中央電視台（CCTV）が「鑑真東渡」という大型連続ドラマを放映した。かように鑑真の名は人口に膾炙している。

日本と中国は「一衣帯水」とは言いながら、長い付き合いの間には、友好的な往来の歴史もあれば、戦争がもたらした苦い傷跡もある。しかし、過去がどうであれ、一つ疑いのない点がある。それはつまり、現在から将来、人類の発展が直面する大きな環境、大きな背景の中、古代のような「国を滅ぼし民を根絶やしにする」といった野生の掟はとっくに歴史の遺物となっており、弱肉強食という大が小を欺くという国際関係も次第に支持を失いつつある。平和は両国に利をもたらし、争いは損失をもたらしということ、これは日中両国の知識人の間ではすでに共通認識となっている。であるから、「ゼロサム」の発想を捨てて「win-win」の実現に努力することこそが、賢明で最上の選択と言えよう。

ところが日中両国の歴史認識には食い違いがある。この食い違いがある意味必然的なことであるならば、我々はどのようにしてこのような食い違いを解決すればよいのだろうか。日中両国の歴史認識の食い違いを解決するには、理性の上に立ち、事実に依拠し、大同を求め小異を残すことが大事である。理性の上に立つということは、つまり世界の歴史の発展の大勢をはっきりと見極めるということである。情報化が進み、世界経済の一体化が加速し、人類が数百万年生活してきたこの星が「地球村」と呼ばれる今日において、全

人類の利益がかつてないほど密接に係り合い、各国各民族の差異は依然として存在するものの、一体化の趨勢は不断に加速しつつあり、しかもこの趨勢はもう止めることはできない。

事実に依拠するということは、つまり、事実をはっきり整理したうえで基本的共通認識を形成するということである。日本が近世において中国や東南アジア各国を侵略したことは争えない事実である。この点は、およそ理性と正義感のある日本人であれば、みなが認める点であろう。日本の行為がアジアの多くの国家に対する侵略であり、侵略された国の国民に多大な損害をもたらしたという事実は変えようがない。大同を求め小異を残すということは、つまり、当面共通認識を得られない問題はしばらく保留し、とにかく激化しないようにしておいて、大局に重点を置くことである。日中両国の根本的な利益と世界と人類の根本的な利益に重点を置くということである。

以上のような観点に立って始まった鑑真プロジェクトであるが、日中の若い学生の友好交流は、その旅を終えて確実に新たな一步を踏み出したと言える。

1-2. スタートは早大中国塾（2007年10月6日開催）

本事業の起点は、早大中国塾メンバーであり、二十数年にわたり日中友好に尽力してきた福岡在住の青木麗子氏が、2007年7月に書いた「鑑真和上を偲び、日中両国の未来に思いを馳せて」という手記にある。青木氏は、福岡市博物館で開催された「国宝―鑑真和上展」で鑑真和上座像に初めて接したという。手記には、こう書かれている。「穏やかな鑑真和上の尊顔には強く心を打たれ、仏教東漸の使命の下、不惜身命で経てこられた苦難の行程を思うと熱い物が込上げて来て、暫しその場から離れることができませんでした。（中略）鑑真は太宰府の戒壇院にて戒律を授戒され、唐招提寺に入られた後には、造寺造仏、戒律の授戒に余生を尽くされ、日本で命の最後を燃え尽くされたのです。（中略）今の日中両国間のギクシャクが天国に居られる鑑真和上から見れば、人間はどうしようもなく小さくなってしまったのだと嘆いておられるに違いありません。今の世情を作り出したのは、我々現代人がすべてを利益最優先だと考え、拝金主義、金銭至上になり、利己的で「徳」をなくしているからではないかと、そう思わずにはいられませんでした。日中両国民がお互い「徳」を積み、もっと利他的な考えをもつ事ができるようになった暁に初めて、諍いのない日中関係が実現されるのかも知れません。自己中心的、利益追求最優先という考えを変えない限り、人びとに安息な日々はやってくることはないと思うのです」と。

この手記を読んだ同じく早大中国塾メンバーで亜細亜大学の範雲濤教授（復旦大学出身）が「この気持ちを日中青年交流事業につなげてはどうか」と提案、谷野作太郎元駐中

国日本大使など多くの人々がこれに賛同、本事業が立ち上がることになったのである。私も、賛同者の一人だが、鑑真和上は日本人、中国人双方が熟知、敬愛している人物だという点に着目したからである。

青木麗子氏の提案（2007年7月）を受けてプロジェクトの種が蒔かれ、早大中国塾で成熟していく。半年後の中国塾（2008年1月19日開催）までに思いを同じくする同志を集めてプロジェクトの骨格を固めていくのである。

2008年2月から訪中までの半年、実行委員会は、中国在住の顧問や特別協力者を決め、総合企画、組織作り、募金活動、後援要請、学生募集と作文審査、予算案づくり、中国受け入れ機関（単位）などとの協議に忙殺された。民民事業ではあるが、資金的な面で日本政府の国際交流事業の一つとして認定してもらうため、任意団体としての定款、規約などの作成から始めた。政治の世界は福田首相の就任により政冷経熱からやや友好ムードにチェンジしていくが、マスコミ報道に現れる両国の国民感情は一朝一夕では改善に向かわなかった。そのころ、「餃子事件」や「チベット問題」に端を発する「オリンピック聖火事件」など日中関係を緊張させる事件が続いて起こったのである。プロジェクト発足のタイミングとしては良くないのではないかとの意見が出た。さらに輪をかけたのは5月12日発生した四川省大地震である。死亡者、行方不明者など災害を受けた人数は日々増加していき、我々自身も地震見舞金の募金に走ったりしたが、事業の行く末について不安が募っていった。そのような中、四川に向かった日本からの救援隊が、被災者に黙禱を捧げる姿が中国のテレビで放映された。中国では好ましくない映像は政府による報道統制が行われると言われているが、このニュースが何度も放送されたことは事実で、日本に対する中国政府の対応に変化の兆しが見えてきたと感じた。中国側の友人たちにプロジェクトの続行の是非を相談すると「それとこれとは違う、皆さんの来訪を待っている」というメッセージをいただき、もしかしたら無期延期となっていたかもしれない本プロジェクトを予定通り実行することを決断したのである。

さて約1200年前の唐の時代は、命の危険を冒して日本からは遣唐船が中国に渡り、帰路中国の文化が日本にもたらされたことは先に述べたが、この時代で光る存在といえる鑑真和上の生き方を現代の若者が検証することは有意義である。本プロジェクトが期待したことは、日中の若者同士が生身で付き合う機会を作ることができれば、そこに友情が生まれる。そして、この友情の輪が広がると同時に、実際に目で見て聞いたことを日中両国の若者達が周囲に伝えていくことにより新たな理解の輪が広がっていくに違いないということである。

鑑真は、日本に仏教の戒律や天台宗の書物、それに三千粒の仏舍利など、現代流にいえば貴重なソフトウェアなどを伝え、彼の望む形で作られた唐招提寺は律宗布教の拠点とな

った。しかし、インドから渡来した中国仏教がインド仏教と大きく異なる形で「現地化」したように、日本においても、中国・朝鮮半島から伝来した仏教は「現地化」し、強く根を張った。鑑真の伝えた戒律は日本には根づかなかった（例えば、日本では、戒律の厳密な解釈からは許されない僧侶の妻帯肉食が一般化した。私は日本でそういう形の「現地化」がなされたことは不自然ではないと思っている）。とはいえ、日本人の鑑真への尊崇の念が低かったわけではない。日本朝廷の招請に応じて、国禁を破り、身命を捨てる覚悟で渡日し、多くの知見を伝えてくれた鑑真に対し、日本人は心底からの尊崇の念を忘れることはなかった。江戸時代の偉大な俳人・松尾芭蕉が、わざわざ唐招提寺を訪れ、鑑真坐像を見て、「若葉して、御目の雫（しずく）ぬぐはばや」という句²⁾を詠んだが、この句は、望郷の思いで涙があふれているように見える鑑真への謝意をわれわれはひと時も忘れませんよ、という日本人すべての気持ちを代表したものとされている。

1978年、「4つの現代化」を進める方途を探るために訪日した中国の最高指導者・鄧小平氏は唐招提寺を訪問して次のように語った（「一件具勇深遠意義の盛事」）。「その鑑真像を見て深く打たれた。日本人がこの像を1200余年にわたり、真心込めて保存、現在に至っている、值得我們敬佩和感謝」。日中双方の思いが繋がった瞬間であった。両国にとって、最も大事なことは、（今や）仏教それ自体やその戒律ではなく、裏付けのある相互尊敬と相互信頼の気持ちだと思うのである。

2. プロジェクトの発足

2-1. 「鑑真記念・逆渡航日中青年交流計画実行委員会」発足

2008年度が明けた第1回目の中国塾（2008年4月19日）開催までにプロジェクト名を「鑑真記念・逆渡航日中青年交流計画実行委員会」と決定した。メンバーには大学教授、元大使、有識者、民間企業経営者、中国関連コンサルタントなどが名を連ね、委員、顧問それぞれが持ち味を生かして行動を開始したのである。鑑真ゆかりの地の訪問先（江蘇省人民政府、揚州人民政府、揚州大学・寧波の寺めぐりなど）は福岡県上海事務所苗井章紀氏が、3つの大学は、顧問の八木宏之氏（南京大学卒）、雷海濤氏（浙江大学卒）、陳雲氏（復旦大学）が交渉に当たってくれた。国内組は企業訪問による協賛の呼びかけ、参加学生公募と応募作文の審査、日本政府はじめ自治体への支援助成手続き、マスコミへの情報提供など、それぞれが本業を持ちながら精力的に準備を進めていったのである。

【実行委員会の構成】

最高顧問：稲森和夫（京セラ名誉会長）

委員長：木下俊彦（早稲田大学客員教授，早大中国塾代表）

委員：谷野作太郎（元駐中国日本大使，日中友好会館副会長）

範 雲濤（亜細亜大学教授・弁護士）

青木麗子（DCL コンサルタント代表，九州上海事務所エグゼクティブ・アドバイザー）

五十嵐貞一（国際空港上屋㈱代表取締役会長，NPO 中国留学生交流支援立志会理事長）

折敷瀬興（一橋大学名誉教授，㈱アジア人材開発代表取締役社長）

小野豊和（東海大学教授）

橋本吉文（Bridge Roots law office 代表弁護士）

顧問：雷 海濤（東芝[中国]副総裁兼研究開発所長，浙江大学卒）

八木宏之（伊藤忠[中国]勤務，南京大学留学）

宮内雄史（東京大学北京代表所所長）

松野 豊（野村総研・清華大学中国研究中心理事）

陳 雲（復旦大学国際関係与公共事務学院副教授）

段 躍中（日本僑報社代表）

プロジェクト発足時の 新聞

（日中新聞，
07.12.11）



3. 参加学生の全国公募

参加学生の公募については、広く全国規模を目指そうとの思いから、新聞、ブログなどを活用した。結果として、東北から九州までの19大学から31名を選考することができた。募集要項は下記の通りであるが、2割を日本に來ている留学生としたことが、全体を運営する上で大いに役立った。一つの例をあげると、日本に來ている中国からの留学生はキャンパスで日本人学生との交流がほとんどないことが分かった。8泊9日の旅では“同じ釜の飯を食う”関係となるわけで、好むと好まざるにかかわらず相互理解が進んだ。ある留学生は「日本人学生の通訳を通じて日本人の心を理解することができた」、また、ある日本人は「キャンパスに戻ったら留学生ともっと交流しよう」「鑑真プロジェクトの成果をサークルで伝えよう」など予想を超えた具体的な行動へ深化していった。応募要領、学生内訳などは下表の通りであるが、参加学生には“一人一役”の任務を与えた。

なお、選考段階では全国20大学から32名の学生を合格としたが、餃子事件、チベット事件、四川大地震などの社会不安からご両親の承諾が得られず1名が辞退となった。

鑑真和上記念「逆渡航・日中青年交流計画」参加学生募集

過去2000年にわたる日中交流を回顧してみると唐の時代が最も円滑でした。現代の困難な問題を解く鍵も、その時代にあるのではないのでしょうか。唐の時代の日中交流で一番光る存在が鑑真和上です。今から1255年前、揚州大明寺の鑑真和上は、幾多の困難にもめげず、百折不撓で渡航を試み6回目にして日本に到着し、唐招提寺を創建。仏教をはじめ医療、薬学、美学、建築など多岐にわたり日本の文化発展に多大な貢献をしました。

本計画は、鑑真和上こそが今改めて陽をあてるべき偉人ではないかとの発想に基づき、大阪から逆ルートをフェリー「新・鑑真号」で渡り、洋上で研修ののち上海に上陸、南京大学での交流の後、鑑真和上ゆかりの大明寺や寧波訪問、その後、浙江大学、復旦大学を訪問し、日中青年による相互交流を行うことにより相互理解と友情を深めることを目的としています。

この計画に参加を希望する学生を全国から募集します。選考は、下記応募条件応諾と作文をもとに審査委員会で判断し決定します。

【募集要項】

対 象：大学生（学部生、院生も可）

募 集 人 員：30名（日本人25名、中国人留学生5名）。

応募作文：「日中関係改善に向けて私がしたいこと」

応募作文規定：字数は800字以上1000字以内，日本語で書くこと。

大学名・学部・学年（大学院生の場合は専攻と課程名），氏名（ふりがな），年齢，性別，連絡先（住所，電話番号，メールアドレス）記入のこと。

募集期間：2008年4月25日から6月20日（当日消印有効）

応募先：〒162-0045東京都新宿区西早稲田1-21-1-106，

早大中国塾内鑑真記念・日中青年交流計画実行委員会事務局

【詳しくは】ホームページ参照：<http://homepage3.nifty.com/tkinoshita/>

逆渡航期間：2008年9月9日から17日（8日夕刻，大阪の指定地に集合のこと）

参加費用：学生1人当たり35,000円

参加条件：①文部科学省認定大学法人の学生であること。

②健康状態が良好で，この旅行全行程を同行者や他の学生と友好裡に過ごすことができること。中国語能力は問わないが，できればベター。

③2008年9月時点で6ヵ月以上の旅券（パスポート）を有すること

④8月26-27日実施予定の奈良・唐招提寺での一泊事前研修に参加できること（ただし，唐招提寺までの往復旅費交通費は自己負担。宿泊費は不要）

⑤大阪港出発当日まで，また帰国解散以降の旅費は自己負担とする。

⑥5cm×5cm程度の顔写真，提出。

選考：選考委員会において厳正に審査，決定します。

発表：2008年7月上旬頃，合格者に直接本人に通知します。

主催：鑑真記念・日中青年交流計画実行委員会

後援：国際交流基金，福岡県，外務省，中国大使館，在福岡中国領事館，（予定を含む）唐招提寺，中国江蘇省，南京大学，浙江大学，復旦大学ほか。企業・個人の寄付募集も行う。

◆問い合わせは早大中国塾代表・木下俊彦（toshi-kinoshita@nifty.com）および小野豊和（toyokazuono@gmail.com）まで。

小野豊和

合格学生の内訳(1) 大学生・院生 *カッコ内は留学生

	男(留学生)	女(留学生)	合計(留学生)
大学生	11(0)	16(3)	27(3)
大学院生	3(3)	1	4(3)
合計	14(3)	17(3)	31(6)

合格学生の内訳(2) 大学別 *カッコ内女性

	日本人	中国人		日本人	中国人
諏訪東京理科大学	1(1)	1(1)	杏林大学	1(1)	
高崎市立経済大学	1		東京外国語大学	1(1)	
埼玉大学		1(1)	東海大学	4(3)	
城西国際大学	1(1)		長岡大学		1(1)
早稲田大学	2(1)	2	立命館大学	1(1)	
慶應義塾大学	1(1)		九州大学	1	
明治大学	1		福岡大学	3	
中央大学	1(1)		中村学園大学		1
東洋大学	2(1)		久留米大学	1(1)	
亜細亜大学	3(1)		合計	25(14)	6(3)

*留学生：中国から日本に来ている留学生

4. 参加学生に与えた“一人一役”

さて、全国公募で選考した学生に対して出発1週間前に奈良一泊研修を行った。研修初日の早朝、木下実行委員長と私で奈良県の荒井正吾知事を表敬訪問した。ひと月前に中国の胡錦濤国家主席が唐招提寺を訪問し、約1250年前の鑑真和尚上陸日を偲び、未来志向の新たな日中関係の絆を強めようとしただけに、プロジェクトの趣旨を大いに理解し励ましをいただいた。

奈良青少年会館（ユースホステル）で、一同が初めて出会うことになったが、同じ志を持つ学生はすぐに溶け込み合い、旧知の友のような関係になっていった。旅を円滑に進めるため、全員に“一人一役”の役割を与えた。レクリエーション班（訪問先での交流イベントの企画、土産の準備など）、ロジスティック班（移動、宿泊に伴う点呼と規則正しい集団生活の維持管理）、記録班（旅の克明な記録と参加学生の感想聴取など）、医務班（ハードスケジュールでも体調が維持できるようなサポート体制）、総務班（委員の秘書、通訳から雑用まで）で、この役割を出発1週間前の奈良研修で与えたことが旅を進めていく上で大いに効果を上げたのである。ネット時代を反映して、出発までにそれぞれがアイデ

ィアを絞り情報交換を行い、大阪港から上海までの48時間の船上研修でその成果が発揮された。

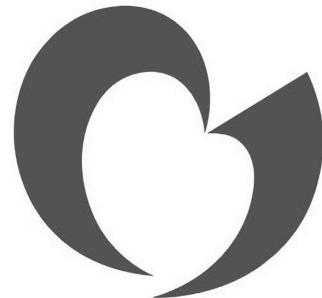
一例を挙げると、レクリエーション班の一人で元宝塚歌劇団員は「寸劇・鑑真」の脚本を書き上げてきた。これを参加留学生在が中国語に翻訳、キャストを決めて練習を繰り返した。また、訪問先に贈るアルバムの制作も、船内研修が終わってから深夜までかかって全員が心をこめて行った。参加者の顔写真に一言を添えるアイディアは良い記念になった。さらに楽器持参の呼びかけに応えて一人がトランペットを持ち込んだが、行く先々での日中学生合作コーラスのリード役として頼られる存在となった。

5. 国際交流基金などに資金助成を要請

国民交流活動ではあるが、運営資金として6～700万円要することから、国をはじめ各方面に協賛金を募る活動を開始した。折りしも、2008年は前年の日中国交回復35周年を受けて「日中青少年交流年」と位置づけられ、政府間交流イベントは数多く計画されていたが、本プロジェクトはあくまでも民間ベースで進めることを原則とした。そこで、まず国際交流基金のなかの「市民青少年交流助成・カテゴリーA（海外との交流事業）」の申請を行うことにした。申請には実態のある団体であることが条件のため、まず実行委員会の組織づくりから始めた。定款・規約の策定など全くの手探りで進めたが、周囲の温かい支援の輪が広がっていくことによって、マスコミ報道も可能となり、日本経済新聞、毎日新聞、西日本新聞、共同通信、時事通信、NHK³⁾などに取材・報道の協力をいただくことができた。

国際交流基金からは時節柄慎重な審査となったが、最終的に126万円の助成金をいただくことになった。また福岡県からは2度にわたって合計100万円の助成金をいただくだけでなく、出先の福岡県上海事務所が率先して訪問先との交渉を行っていただき、通常のツアーでは体験できない計画を立てていただいた。

参加学生の負担を極力抑えることにして参加費は1人35000円（実際の費用は約20万円）に決定、運営資金の大半は本プロジェクトに賛同いただいた企業と個人からの協賛金で賄うことにした。中でも株式会社京セラには協賛金をいただき、さらには名誉会長の稲盛和夫氏に本プロジェクトの名誉顧問を引き受けいただいた。日本航空には、上海からの帰路航空券の現物提供と言う破格の支援もいただき、



明天会更好

2008中日青少年友好交流年

かつ、杭州での浙江大学、上海での復旦大学との交流会にも代表の方に参加していただいた。

また外務省には日中青少年友好交流年のシンボルマーク使用の許可申請を行った。Japanの「J」とChinaの「C」の組み合わせでできた図案には「明天会更好」、つまり、「明日はもっとよくなる」という意味が込められている。日中の若者が交流することによって、明日の日中関係がもっと良くなることを期待して、旅の葉にこのシンボルマークを使用した。

実行委員を中心に各界に支援を要請した結果、下記のような資金を得ることができた。

運営資金合計

6,409,140円

◎助成金： 国際交流基金

1,260,000円 (200万円申請)

福岡県

1,000,000円

◎企業からの協賛金

2,050,000円

企業名	協賛金	企業名	協賛金
京セラ	300,000	阪和興業	100,000
監査法人トーマツ	300,000	日立テクノロジーズ	100,000
Corns & Co.,Ltd	300,000	iAEX	50,000
廣告社	300,000	福岡金属工業	50,000
東芝	300,000	アネムホールディング	50,000
オムロン	150,000	東洋証券	50,000

◎個人からの協賛金

1,014,160円

◎現物支援： 日本航空 「上海ー福岡ー関空ー羽田」チケット

(実勢価格で247万円相当)

◎学生の参加費： @35,000円 × 31名 = 1,085,000円

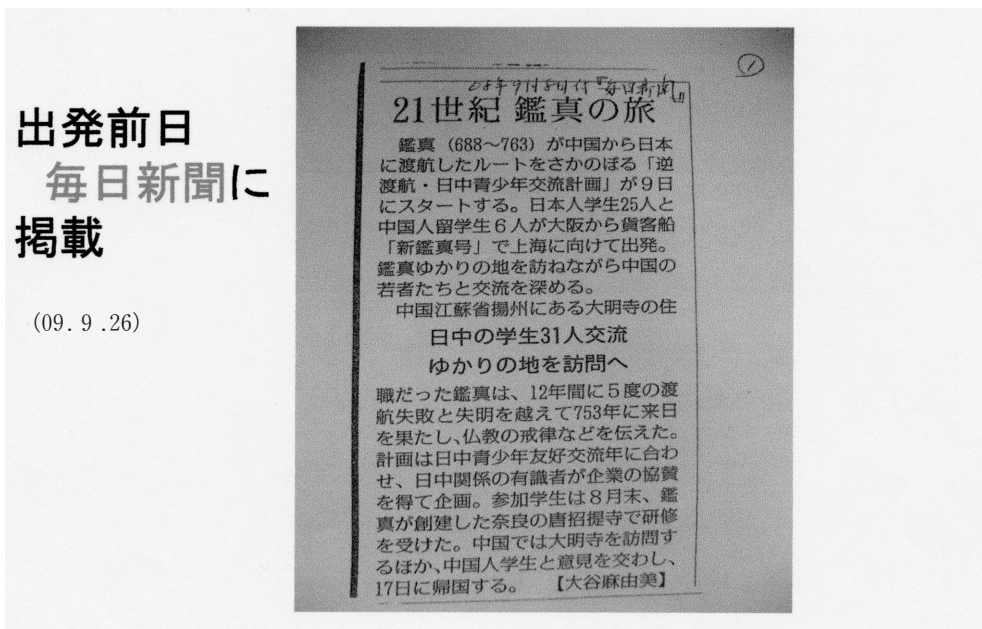
6. 中国の旅と訪問大学における日中青年交流

本プロジェクトは「中国の旅」⁴⁾実現に向けた事前の段階と、旅の本番、そして、旅を終えてからの若者の意識の変化の3つのステップで構成され、それぞれのステップが次につなぐ重要な役割を果たしたのである。事前の段階は、出発一週間前に実施した奈良一泊研修である。全国から集まった学生・留学生が初めて出会う場であり、このプロジェクトの意義を伝える導入部分である。参加日は35,000円に抑えたものの、この事前研修参加の交通費は、参加学生の個人負担とし、参画への意欲を確認する機会としたのである。自己に投資することによって「教えられる造られた海外ツアーではなく、自分たちがプロジェクトの主体者で、自分たちが知恵を出し合わなければ、最終的に自己に還元されるプロジ

エクトの成果はない」ということを、各人が納得し、この時点から旅がスタートしたのである。一人一役の精神で全員に役割を与え、それが一週間後の再集合までに具体化していったのである。

唐招提寺では、寺の執事による講話によって仏教の世界に引き込むことができた。鑑真廟の前で、21世紀に逆渡航を目指す青年たちは決意を新たにしたのである。

旅の本番は、約1250年前の鑑真のゆかりの寺などを訪れ、その精神を学ぶことに重点を置いたが、もう一つ重要なポイントとしたのが現代に生きる日中学生の交流である。それがどう行われ、我々はそこから何を学んだかについて説明する。



本プロジェクト最大のポイントは日中青年交流にあった。上海上陸の日の夕刻は鑑真ゆかりの揚州大学で歓迎レセプションがあった。交通事情の影響で到着が2時間以上遅れの夜の8時スタートとなったが、夕食会は、日本語と中国語、一部英語を交えての交流となった。他の3つの大学（南京大学、浙江大学、復旦大学）では意見交換会が行われた。双方が意見交換で得たものは多かったと思う。しかし、日本から参加した学生の大半が認めたように、中国の学生は総じて語学（特に英語。日本語学習中の学生の場合は日本語）能力が高く、また、自身の意見を明確に述べ、矢継ぎ早に質問する傾向が強かった。それに対し、日本から参加した学生の中には中国語能力が比較的高い学生もいたが、英語能力はそう高くなく、同行した在日留學生の通訳に依存するケースが多かった。また、質問に対し、意見はそれなりに述べたが、自身の意見なのか、日本での傾向を述べているのか明白でない場合が少なくなかったように思う。こういう表現は、学生だからということでは

く、日本人一般の傾向である。すなわち、高らかに自身の意見を多数の人間に主張し、議論で相手を打ち負かす、あるいは、他人と自身の意見の差（白黒）を際立たせるというよりは、相手の意見で自分と同じ考えの部分に合づちを打ちつつ、自身の意見を付加しながら相互理解を進めるのが自然という日本人古来の対応（「和を以て尊しと為し、さこ（逆）うこと無きを旨となせ」）に沿ったものともいえる。そういう日本流を卑下する必要はないし、外国に行くからといって急に日ごろの対応を直せるものでもない。しかし、異文化交流時には、論理対立をできるだけ避け、協調できる部分をなるべく探そうとしすぎると、却って相互理解が進まないケースも多い。若いときに中国流・欧米流の議論の仕方でも学んだ方がよいであろう。そういう意味で、今回のような交流体験の機会をもって、相手方の発想や表現方法に慣れることは意義が多いと思う。とはいいながら意見交換は大いに意味があったと思う。とくに、復旦大学での複数の分科会でなされた議論では、中国留学生と日本からの参加学生でかなり際立った意見の差異が見られ興味深かったので、あえて紹介することにする。

復旦大学での青年交流

復旦大学では4つの分科会によるシンポジウムを行った。「若者の自殺」と「女性の社会進出問題」をまず取り上げることにする。

討論の材料としてアンケート調査（対象は日本人学生と中国から日本に來ている留学生および中国で学ぶ中国人学生と日本人留学生）を事前に実施し、データを見せながら議論を進めた。統計によると日本人の年間自殺者が約33000人に対して中国人は28万人と言われている。人口比でみると自殺率は日本の2.5%に対して中国は2.1%と低い。日本の自殺の原因を学生に聞くと、日本人学生は「家庭崩壊」を第一とし、次いで「学校などでのいじめ」「少子化による他人とのコミュニケーション不足」と続くが、日本に住む中国人留学生によると「学校などでのいじめ」を第一とし、次いで「家庭崩壊」「インターネット犯罪」を挙げている。中国現地の学生が考える日本人の自殺については「入試、就職の失敗」を第一に挙げ、「家庭崩壊」と「いじめ」が続いた。

一方、中国人の自殺の原因について、日本人学生は「入試、就職の失敗」を第一に挙げ、次いで「両親の子供への期待過剰」を挙げた。中国人学生も「入試、就職の失敗」を第一に挙げたが、「家庭崩壊」も同レベルだった。留学生で見ると、中国人留学生は「入試、就職の失敗」を第一に挙げたが、日本人留学生は「入試、就職の失敗」「家庭崩壊」「インターネット犯罪」「コミュニケーション不足」を同レベルで挙げたため決め手になる回答がないとも言える。

実際の討論においては、日本人学生が、昨今流行している若者によるインターネット犯

罪（自殺勧誘の自殺サイトなど）を挙げたが、中国人学生は「理解できない」とし、中国の場合は、アンケートが示すように「入試、就職の失敗」が多い実態を説明してくれた。そして、現実には多いのは生活苦に悩む農村女性で全自殺者の過半数を占め、都市部の場合は、「受験や就職の失敗」「両親等のプレッシャー」が原因による自殺が多く、日本で流行している自殺サイトを通じた見知らぬ者同士の自殺には理解を示さなかった。

次に「女性の社会進出における深刻な問題」について議論を行った。日本社会の現象について中国人学生に聞くと「いまだに残る男尊女卑社会」を一番に挙げ、次いで「高学歴による未婚率の高さ」が続いたが、中国からの在日留学生も同じ傾向で、3番目以降は「少子高齢化に伴う介護問題」「経済的自立」と続いた。一方、日本人学生に聞くと「少子高齢化」が一番で、二番目が「男女差別」「高学歴による未婚率の高さ」「子育てが大変」と続いた。中国に留学中の日本人学生は「子育てが大変」を一番とし、二番目が「未婚率の高さ」となったが「言われるほど深刻でない」という意見もあった。

一方、中国の状況について中国人学生は日本人の場合と同様に「男尊女卑社会」を第一に挙げ、次いで「高学歴女性の未婚率の高さ」「一人っ子問題」「家庭崩壊」を挙げたが、日本人学生の見方としては「一人っ子問題」を第一とし、次いで「男尊女卑」「経済的自立」を挙げた。留学中の日本人学生も「一人っ子問題」を第一に挙げ、次いで「未婚率の高さ」「就職の困難さ」が挙げられた。

13億という世界最大の人口を抱える中国では、改革開放政策を始めた1970年代に「一人っ子政策」を導入し、通常は一家族に付き子ども1人、2人目が生まれると高額な罰金を強いる政策を導入したのである。結果として一人っ子は、両親と祖父母の6人（全員存命であった場合）の大人から一身に愛情を受けることになる。「一人っ子」側から考えると、親の病気、老後の面倒などを一人で背負わなければならない義務を負うことになった。逆に大人から一身に愛情を受けて育った「一人っ子」（小皇帝と呼ばれる）は甘やかされて育ち、家事などを一人で行う経験も乏しいため自立できない問題も起きている。「一人っ子問題」は一言では解決できない複雑な側面を持っている。今回は女性にスポットを当てたことから問題視されたが、男性についても親の負担はもちろん、甘やかされて育った一人っ子が社会への適応性に欠ける問題も起きているという。

議論の中で日本人学生にとって意外な質問が出た。中国側から「日本は専業主婦が多く、彼女たちはその存在に大きな価値を見出しているのか」「スキルを身につけていないと離婚した時に困るのではないのか」という質問が出たときには、日本人学生は一瞬言葉に詰まってしまった。中国では女性の社会進出は当たり前で、仕事も結婚も女性自らが持つ力で選択する権利がある。中国人学生から「日本人も大いに権利を主張すべきだ」という意見が多く出た。日本では、雇用面で保障される福利厚生の実充実という環境も原因とな

り、女性が夫の扶養の範囲で働き、「結婚休暇、育児休暇を取っても、また復帰できればいい」という考えを持つ女性が少なくない。つまり「社会よりも家庭における自分の所属意識が高い」ということで、生活慣行の違いが浮き彫りになった。さらに興味深いことは、高学歴の女性が結婚できない理由として日中ともに「三高」を挙げたが、中国の場合は、女性自身が「高収入」「高学歴」「年上」で、釣り合う男性が不足しているようだ。日本女性が期待する「三高」とは、「背が高く」「高収入」「ハンサム」の男性に巡り合う機会が少ないということで、ここでも折り合うことがなかった。

全体を通して、男尊女卑社会という悪習は日中両国に共通して根強く残っている問題ということが分かった。意識とは伝統と社会慣習の中で育つものともいえるが、男女格差を温存する原因としての男女差別社会が女性の社会進出の妨げになっている中国と、ある面保護下にある日本人女性の意識の差を感じた。結婚願望が無いわけではない中国の高学歴女性は「一人っ子政策」が続く限り結婚難を解消できないのではないのか。食糧問題など人口抑制を行わなければならない事情があったとしても、この国の将来は安泰なのかという不安が脳裏をかすめた。

白熱した議論で双方の主張には激しいものがあったが、青年たちの頭脳は柔軟で互いに受け入れる姿勢があった。違いを知り、理解する努力を示し、違いを認め、そして新たな相互理解の糸口をつかもうとする若者を見て日中の未来に明るい光が見えてきた。政冷経熱と言われた日中関係の氷が解け、春を迎える動きの中で民民外交の重要性を感じ、中国の旅は有効であった。

【アンケート調査で確認した項目は以下のとおり】

Q1. 若者の自殺が増えている原因について

1. 家庭崩壊による心理的影響
2. 入試、就職などの失敗
3. インターネット犯罪関係
4. 学校などでのいじめ
5. 少子化による他人とのコミュニケーション不足
6. 経済的理由
7. 両親の子供への期待過剰

Q2. 女性の社会進出で深刻だと思われる点は

1. 女性の社会進出の少なさ（実質的な男尊女卑社会）
2. 高齢化、親子断絶などの家庭崩壊
3. 高学歴女性の未婚率の高さ

4. 少子・高齢化に伴う介護問題
5. 子育てが大変
6. 就職の困難さ
7. 経済的自立
8. 言われるほど深刻ではない

また、分科会「スローライフ」の議題に対して、日本人学生は、もう経済発展はほどほどでいい、地球環境を重視し、住みやすく、安全な社会づくりを望んでいたのに対し、中国人学生は、まだまだ高い経済発展が必要で、ゆったりしてられない（中国は日本のように成熟段階になっていない）という意見が多かった。私は、経済成長と地球環境の両立を狙うべきという学生が中国に多くいるのではと思っていたが、必ずしもそうでなかった。

分科会：「若者の自殺」については、両国とも相当な数に及んでいるが、日本では、いじめなど他人との人間関係の中での自殺が多い。これに対し、中国では、受検での失敗や学内競争などに敗れて自殺というような競争社会特有の自殺が多い。中国の学生からすると、なぜ、日本ではそういう孤立した学生を社会や仲間の学生が助けないのかという疑問が強かった。一方、中国の場合は、人間の数は多く、機会やポストは限られているから、激しい競争は不可避で、敗者が自殺するのは気の毒で、大学などがカウンセリングの機会を増やすべきだが、だからといって、競争を減らす方策は考えにくいという認識のように思われる。いずれも厳しい現実で、深く考えさせられる問題である。

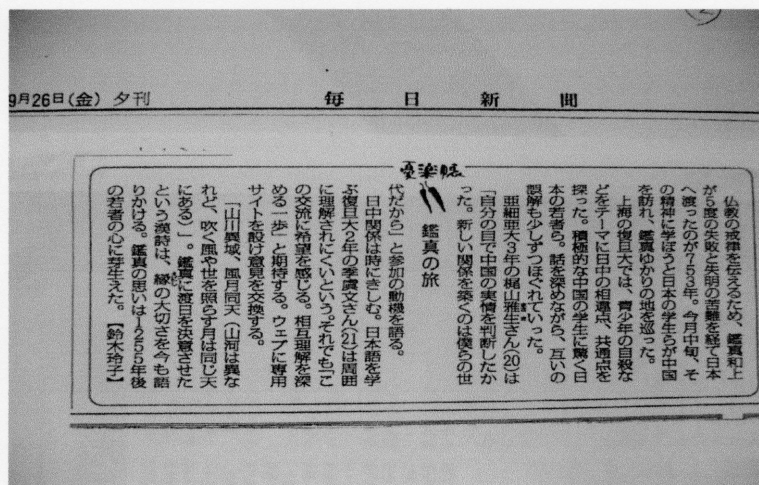
話は飛ぶが、中国人学生は日本のアニメ、マンガ、小説、日本の若者の生活ぶりなどについて結構よく知っていた。他方、日本人学生は中国の学生の猛勉強ぶりは知っていたようだが、その行動様式や趣味などについてあまり知らなかったようだ。在日留学生から、常日頃そういうことを聞き出す努力が欠けているのかもしれないし、日本人学生が関心を持つようなものが現在の中国には多くないということかも知れない。

リクリエーション（余興）を通じた学生交流は、どの大学でも非常にうまく行ったと思う。日中で有名な良い歌と一緒に歌うことがすぐ仲良くなる一番の道のように思われた（今回は、一行の中にトランペットのうまい学生がおり、その伴奏が全体の雰囲気大いに盛り上げたと思う）。また、船中で準備し、稽古を行って実演した鑑真渡日の寸劇は、中国学生に非常に受けた。それ以外に、当初、いろいろな企画が出されたが、時間の制約で、実現できなかった。また、リクリエーションではないが、中国人ボランティアの方々が、日本学生らを10以上のグループに分けて上海の町を案内してくれたが、その好意と着眼点に参加学生から非常に高い評価が与えられた。

復旦大学での日中青年交流 ＜日本経済新聞に掲載＞ (08.10.1)



毎日新聞 08年9月26日



7. 最終課題に夢を託して

旅の締めくくりとして、参加学生に課題を与えた。志を持って旅に挑んだ学生は中国・中国人と出会ってどのように変化しただろうか。また、新たな目標をどのように持ち、そ

れに向かって何をしようと決意しただろうか。プロジェクトの最終の目的は、彼ら自身が、中国で何を見て、何の思い、新たな意識・認識に目覚めたかについて、思いが冷めやらないうちに率直な気持ち・決意を綴ってもらった。結果は、実行委員の思いを超える成果を文字に託してくれた。旅を終えて新たな“日中の架け橋”宣言をしてくれたのである。

「鑑真記念・逆渡航日中青年交流計画」参加者 課題レポート

鑑真を偲ぶ日中青年交流の旅も復旦大学での交流を終え日本帰国の日を迎えました。

鑑真和上のご加護のお蔭でしょう。天候に恵まれ、行く先々での熱烈歓迎に心から感謝しましょう。訪問先でのご住職の心温まる講和、大学での交流が成功裏に進められた蔭には、日本側のプロジェクト実行委員、顧問の意を体して準備を進めていただいた現地参加の特別協力者、また、公務を持ちながら先遣隊として準備万端整えていただいた福岡県政府上海事務所の皆様の協力がありました。改めて関係各位に感謝しましょう。そして、何よりも学生諸君が今回の旅の主役です。作文応募という中国に向けた新たなチャレンジから始まり、奈良・唐招提寺一泊研修、48時間の船上研修を通じて学生諸君自身が作り上げたチームが現地において大いに花開き、学生ひとり一人が日中友好の架け橋となったことでしょう。8泊9日の中国の旅はいかがでしたか。きっと新たな発見と未来に向けた大きな力（温故知新）になったことと思います。応募いただいた作文「日中関係改善に向けて私がしたいこと」がどれだけ実現できたでしょうか。目を見た中国、肌で触れた中国は、学生諸君の心に新しい何かを刻んだことと思います。同世代の若者に直に接し、語り合い、議論し合い、歌を合唱し、そして街に出て見た中国は、どのように映ったでしょうか。

旅のしめくくりとして、以下の課題を与えます。帰国すると秋学期の準備などお忙しいことと思いますが、興奮冷めやらぬうちに取り組んでください。

【課 題】

1. テーマ : 「旅を終えて、日中関係改善に向けて私たち若者ができる新たな抱負・夢」
2. フォーマット : A4 (10.5ポイント、一行40字)、枚数は自由とします。
3. 提出期限 : 2008年9月25日 (木)
4. 提出先 : 木下俊彦実行委員長、小野豊和実行委員宛てにメールで送ってください。

木下俊彦 toshi-kinoshita@nifty.com

小野豊和 toyokazuono@gmail.com

5. なお、テーマとは別に旅の中で気づいたこと（感想、提案、感謝など）がありましたら、課題に続けて書いてください。

～修了課題～	それぞれの“架け橋”宣言
相手の国を知り、自国のことを伝える	学生の交流は良好な日中関係の基礎
まずは身の回りから交流を深めよう、今回の旅は私の人生の大きな財産	日中友好の種を埋めた旅、やがて樹となり森となるでしょう
相互理解への努力	素晴らしい出会いと 私の物の見方を変えた旅
真の理解は生身の人間の交流から	日中の溝、現状を知ることから始めよう
未来に明るい希望が持てた旅	中国の学生はとても友好的
本当の姿は触れてみることから	ひたむきな想いを後世の人々に伝えよう
中国は私の中で“ほぼ零”から“強い興味”に変化した	中国語を専攻した自分の選択に自信が持てた旅
日中の素晴らしい文化を率直に認め、理解し合おう	先入観を持たず本当の姿を見ることで理解が深まる
この体験を多くの若い世代に伝えよう	実際に自分の目で見ることの大切さ
歴史を鑑とし、未来に向かう	民衆交流で永遠のパートナーに
私の中に灯る“小さな火花”を燃え移らせたい	人対人による解決方法こそが友好と発展につながる
互いの真の気持ちに触れる努力こそが日中を繋ぐ架け橋	若者から始めることこそ堅い友好の基盤となる
一人でもいいから中国人と話そう、人間対人間の触れ合いが大事	真摯に相手の言葉に耳を傾けつつ 冷静で熱い議論ができた
個人の結びつきが大きくなれば、草の根的に国際協力を繋がついていく	お互いの違いを認め合い、そしてお互いを知ろうとする気持ちが重要
意識の高さに驚き、刺激的だった中国の学生	メディア報道観呑みではなく 五感で中国を感じた

8. 総括

8-1. 総合評価

帰国後半年を経て、本事業の意義、実施方法、交流効果について改めて思いめぐらした結論を先に述べると、総合的に見て大成功だった。そして、それは、多くの含意を持ち、今後の類似計画を実施する際に、大きな教訓を残したのではないかと思料する。そう判断する理由を述べたい。

第1に、本事業に参加した30人の学生（6人の中国人留学生を含む）全員が、この企画に参加し得難い体験、とくに、鑑真ゆかりの地を訪れ、中国（人）との貴重な触れ合いの機会を持つことができ、本当によかったとの感想文を提出してくれた。学生たちは鑑真ゆかりの大明寺、阿育王寺、それに天童寺、孫文陵（中山陵）など日本との関係の深い歴史を探訪した。上海のような大都市、長距離の橋、寧波などの村落を見た。また、学生は、4大学の温かい歓迎ぶりを体感し、中国の教育戦略、大学生の強烈な問題意識や優れた討論能力、人生目標についての強い上方志向、高い語学能力などに大きな衝撃を受けたよう

である。日本のメディアなどによってつくられたと思われる訪中前の中国（人）のイメージと、実際は全くちがっていた、と彼らは感想文に書いている。また、参加した6人の在日中国人留学生も同行した日本人学生の通訳や町案内を通じて、中国人と異なる日本人の発想などから学ぶことが多かったと述べている。彼らが海外からの訪問客として、両国の民間大使のような気持ちをもって、自国や自国民を観察したとき、深い感慨を持ったであろうことは想像に難くない。

第2に、本団を受け入れてくれた中国側関係者とくに大明寺などの寺院や揚州・南京・浙江・復旦大学が訪問・交流・意見交換が順調に行くよう最大限の協力をしてくれたことである。それは、志をもった学生を集め、民・民交流事業のために訪中するというわれわれの志が、中国のカウンターパートに的確に伝わったためだと確信する。長年コンタクトを続けている朋友も、初めての方々もまことに温かく応対してくれた。

第3に、日中のメディア多数がきわめて好意的な報道をしてくれたことである。われわれは、特別なメディア工作をせず、淡々とわれわれの意図と事業内容を述べただけだったが、多数の日中のメディアも本事業の趣旨・意義を十分理解してくれたと思う。

第4に、この事業は帰国で終わるといったものではなく、将来の日中間の民・民交流強化のための種蒔きをしたのだと思っている。学生は帰国後、訪中のフォローアップを行い、各自の大学の行事などの機会に訪中の体験報告をしたり、ブログを立ち上げ相互にコンタクトを続けている。日中の学生間でもメール交換も行われているようだ。この訪中を契機として、中国（人）への関心を深め、中国留学を決意した日本人学生もすでに数人現れた（すでに1名は復旦大学に入学済み）。

8-2. われわれは、今後、何をすべきか

大上段に振りかぶるようだが、ここで、過去の日中関係を回顧し、今後の日中関係を考えてみたい。

20世紀前半までの約半世紀に日本が中国国民に多大な犠牲を強いた不幸な時代があったことは、われわれの記憶に新しい。しかし、本事業で再度確認したように、日本は、古来、遣隋使、遣唐使の派遣、相互交易などによって中国から多くを学んだ。20世紀のはじめになると、今度は、中国から魯迅、周恩来を含む数万人規模の中国の知識人（留学生）が渡日、日本各地で学び、日中戦争後の中華人民共和国成立を経て、国交回復後は貿易、投資、ODAなど様々な形で交流を行ってきた。すなわち、両国は、史上、他に例を見ない濃密な相互学習と助け合いの長い歴史を共有している。

では、今、われわれ両国民は、天下に、欧米人などの何十倍も相互を熟知している、なんでも聞いてみってくれと胸を張れるだろうか。ひょっとしたら、世界の多数から、日中両

国人の多くはいつになっても、不倶戴天の敵のようにののしり合っていると陰で嘲笑されているのではないだろうか。両国民は、その嘲笑を事実誤認だと大声で反論できるだろうか。できないとしたら、改善に向けて一段の努力が必要である。

われわれが今なお鑑真を想起すべきなのは、日中間の複雑な感情を越えて、永遠の共生を実現するのは決して容易ではなかろうという認識に基づいている。われわれは、その解決に努めようという若者を探し出し、相手国に同じ志を持つカウンターパートを見出す一歩を踏み出した。現在、世界金融危機、地球環境、北朝鮮問題への対応、津波・地震などの災害対策など相互協力しうることも多い。そういう共通利益から協力を開始することは現実的である。

とはいえ、かたや、中国は、長期の反植民地状態を脱し、日本の10倍の人口、26倍の国土を持つ世界第3位の経済大国、世界の政治大国であり、かたや、日本は、アジアで最も早く近代化を果たし、今なお、世界第2の経済・技術大国である。両者の政治体制・発展段階は異なり、歴史認識は必ずしも一致しておらず、時として、ナショナリズムが噴出する。その2大国が幅の狭い海を挟んで、相対峙しているのである。

二度の大戦後のフランスとドイツの歴史的和解がよく引き合いに出されるが、かつて、ローマ帝国や神聖ローマ帝国の1地域であった両国の国民多数は、キリスト教文明を共有してきたし、国土面積も人口もそう変わらない。日中関係とは相当ちがう。日中は、政府間で「戦略的互惠関係」を確認すれば、あとは時間を待てばいいというわけにはいかないのである。政府間協定はあくまで形であり、そこに魂を入れられるかどうかのポイントである。ひょっとしたら、どうあがいても、ある期間は、両国の摩擦の高まりは避けられないかもしれない。したがって、両国指導者や知識人の最大の課題は、その摩擦が暴発しないようにうまく管理することといえよう。そのためには、両国に、鑑真のような不撓不屈の精神（志）を持ち、その摩擦暴発の管理を志す人間を増やしていく必要があると思う。

その目的のために大事だと思うことを数点あげておく。第1に、政府対政府間の協力だけでなく、地域対地域協力、民対民の交流・協力の拡大の重要性である。第2に、青年交流の重要性だ。われわれは、過去の歴史を作りかえることはできないが、これからの歴史は現在の若者を中心に共同の努力でベターなものにしていける余地が大いにあるということだ。第3に、相互学習の重要性をあげたい。双方がそういう気持ちで相手に接すれば、現在を長いスパンの中の一瞬というふうにとらえることができよう。「現在」対「現在」だけでは、面子の問題も絡んで、絡まった糸がほどけないことも多いが、長いスパンでお互いを認識し合えば、より建設的な結果が出てくると思料する。最後に、メディアの役割も挙げておこう。日中では、メディアの役割の認識が異なることが多く、メディアの認識ギャップの克服が求められる。私は、日本人として、まことに情けない、恥ずかしいと思う

メディアが多いと思う。しかし、政府が何らかの形で言論を縛ろうという意見には与することはできない。私が望むことは、読者が賢くなって、よいメディアを選択していくようになってほしいと思う。そのためには、両国の若者が相手の国を訪れ、自らの耳目で相手国の実情を把握してもらうことが必要だ。また、両国のメディアも相手国のメディアと徹底的に相互学習をしてほしいと思う。すでに、その努力は始まったと聞く。反省の弁を書いた書籍も現れ始めた。先は長いと思うが、希望は持てると思っている。

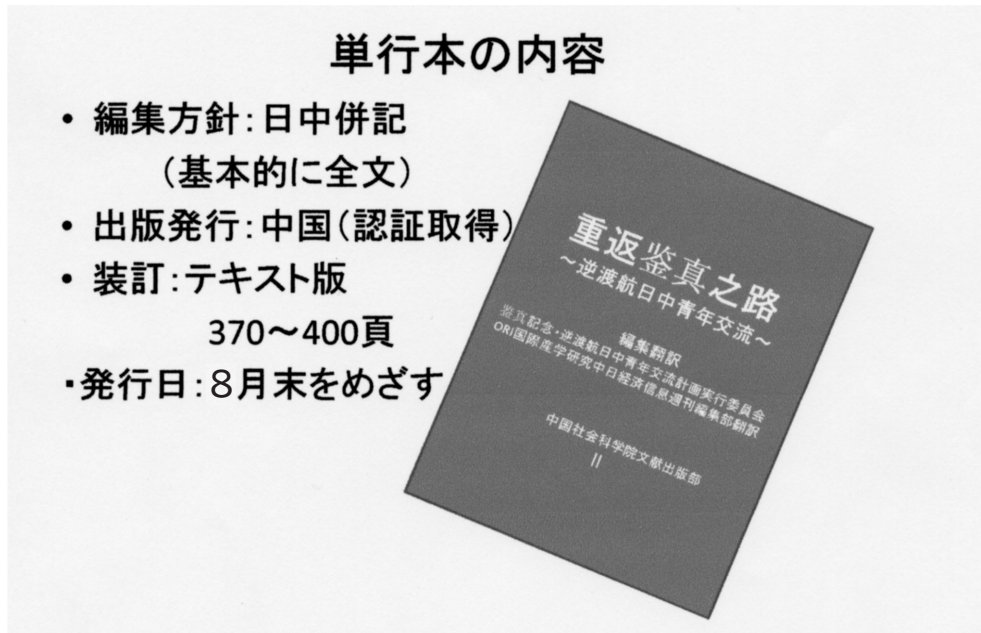
8-3. 1名の脱落者と1名の体調異常者への対応

人が集まると何かが起こる。今回の旅では、出発当日に高熱のため辞退者が1人出た。また、上海まで船で同行したにもかかわらず、体調不良で同行辞退を余儀なくされたメンバーも1人いた。上海に戻った最後の行事となる復旦大学との交流会には参加できなかったものの、残念ながら復調ならず医務班を悩ませてしまった。さまざまなことが起こった旅だったが、全員が再び日本の地を踏むことができ実行委員として安堵した。そして、友情を育んだ若者は、すでに中国留学を実行している者、大学に戻って経験を語り継ぐ者も多く出ている。次に向けたプロジェクトの実行には、資金面、受け入れ準備、新たな体制なども問題があるが、参加したひとり一人の段階では、既にプロジェクトは動き出している。プロジェクトの種が蒔かれて、その種は中国の水を得てすくすくと育ち始めている。すくすくと育った幹には大きな葉が生い茂り、やがて花が咲き、実を付けることであろう。一本の木がやがて森となり、その木陰に日中の若者が集うことになることを期待して本プロジェクトは一旦クローズすることにした。

8-4. プロジェクト総括となる単行本の中国出版を計画

プロジェクトを終えた時、海を越え、時代を超えた大プロジェクトの成果をなるべく多くの人々に伝えたい。ましてや交流を深めた中国の大学・学生にも伝えてプロジェクトの意義、成果を広めるべきとの思いから中国での出版を考えたのである。数ある出版社の中から中国社会科学院文献出版部が、我々プロジェクトの構想を全面的に受け入れてくれた。本のスタイルとしては日中併記とした。現代の若者の率直な考えを日本語・中国語で書くことで、中国人にとっては日本語（日本人の考え方）の学習材料となり、日本人にとっては中国語を学ぶ文献にもなるため、教育の現場での活用を期待したい。中文翻訳はORI 国際産学研究中日経済情報週刊編集部メンバーが日夜を徹して当たってくれた。彼らの献身なくしては本書が陽の目を見ることはなかったであろう。編集を進めるうちに関係者の心には鑑真和尚の不撓不屈の精神がよみがえり引き継がれていったのである。本書は仏教の経典でも、学術書でもない。また、歴史に名を残した人物の偉人伝でもない。

中国を見た現代に生きる若者の心からの叫びをまとめたに過ぎない。逆渡航鑑真の旅は1250年前の時代へのタイムスリップではない。未来に向けた若者の賢い生き方を示すものとなれば幸いである。



- 編集方針: 日中併記
(基本的に全文)
- 出版発行: 中国(認証取得)
- 装訂: テキスト版
370~400頁
- 発行日: 8月末をめざす

注

- 1) 鑑真記念・逆渡航日中青年交流計画実行委員会・ORI国際産学研究中日経済情報週刊編集部翻訳『重返鑑真之路～逆渡航日中青年交流～』（中国社会科学院文献出版部発行、2009.8発行予定）の序から引用。
- 2) 奈良唐招提寺東室の北側の旧開山堂の手前に松尾芭蕉の句碑がある。元禄元年（1688）ここで、鑑真和上坐像を拝した際に芭蕉が詠んだ。
- 3) NHK 大阪が大阪港出発の日（9月9日）の正午のニュースで約1分間紹介。
- 4) 中国の旅のスケジュール（事前に実施した奈良一泊研修も含めて）。

	日 期	都市名	発着時間	交通機関	行 動 予 定	宿泊
事前 一泊	2008年 8月26日 (火)	奈 良	10:00 15:30		奈良県荒井正吾知事表敬訪問 〈事前研修〉(奈良青少年会館) 本企画説明, 参加者全員ミーティング・準結団式 役割分担 (記録・ロジ・医務・レク・総務各班)	
研 修	8月27日 (水)	奈 良	10:00 13:30		唐招提寺参拝 (講話, 鑑真廟表敬等) 薬師寺参拝	
前 泊	9月8日 (月)	大 阪	16:00		〈出発前日研修〉 結団式, 全員ミーティング, 現地でのイベント等 確認, 新大阪ユースホステル泊	

＜中国現地ツアー＞					
1	9月9日 (火)	大阪港	12:00発	新鑑真号 (船 舶)	10:00 大阪港国際フェリーターミナル集合 乗船後：船内生活オリエンテーション（※諸注意） 船内活動（実行委員による講話等） 船内泊
2	9月10日 (水)			新鑑真号 (船 舶)	終日：船内活動 ※中国青年交流事前学習 ☆日中歴史講座 ☆中国語講座 ☆交流会の準備 船内泊
3	9月11日 (木)	上海港 上 海 揚 州	12:30着 13:30発 18:30着	専用車 (貸切バス)	午後：上陸（入国審査等）＜昼食は上陸後＞ 専用車にて江蘇省揚州へ ※所用時間：5h 夕刻：揚州市人民政府主催交流会（揚州大学） 揚州泊
4	9月12日 (金)	揚 州 南 京	13:00発 14:30着	専用車 (貸切バス)	午前：大明寺、鑑真学院にて交流会＜昼：精進料理＞ 午後：専用車にて南京へ（1.5h） 南京大学との交流会 夕刻：江蘇省人民政府主催歓迎会 南京泊
5	9月13日 (土)	南 京 杭 州	08:00発 12:00着	専用車 (貸切バス)	午前：専用車で杭州へ移動 ※所要時間：4h 午後：浙江大学にて交流・110周年記念桜の園見学 歓迎会（学生食堂） 杭州泊
6	9月14日 (日)	杭 州 寧 波	09:00発 11:00着	専用車 (貸切バス)	午前：専用車で寧波へ ※所要時間：2h 午後：鑑真縁の地（大明寺、阿育王寺、天童寺等）を訪問 寧波泊
7	9月15日 (月)	寧 波 上 海	13:00発 16:00着		午前：日本と縁の地を訪問 午後：専用車で上海へ（大橋利用） ※所要時間：3h 夕刻：夕食会 上海泊
8	9月16日 (火)	上 海 滞 在		専用車 (貸切バス)	午前：グループ行動 午後：復旦大学でシンポジウム開催 夕刻：「さようならパーティ」 上海泊
9	9月17日 (水)	上海虹橋 東京羽田	12:50 16:40着	JL8878 (航空機)	10:00 ホテルチェックアウト 東京組は→上海虹橋空港へ 関空・福岡組は→浦東空港へ 各空港で出国検査後、航空機にて上海～各地へ到着後、各空港にて解散
		上海浦東 関 西	13:25 16:30着	JL794 (航空機)	
		上海浦東 福 岡	18:10 20:50着	JL614 (航空機)	

参考文献

- (1) 井上靖 (1964) 『天平の薨』新潮文庫。日本皇室の意を受けて、戒律を日本にもたらす師を求めて唐にわたり、ついに鑑真和上に遭遇、その訪日を実現した栄叡（客死）、普照という二人の僧の生きざま、渡日を目指す鑑真の不屈の意志、相次ぐ不運、それらをめぐる日中関係者の人間模様を描いたベストセラー。

- (2) 樂敏編著・田建国・岩城浩幸・田建華共訳 (2005)『鑑真東渡』。鑑真の来日について最も詳しい。徐福, 王仁, 空海, 栄西などについても記述。
- (3) 唐招提寺編 (1998)『唐招提寺』学生社。
- (4) 田中館哲彦 (2001)『唐招提寺と鑑真和上物語』汐文社。
- (5) 遠藤証円 (2004)『鑑真和上——私の如是我聞——』文芸社。著者は唐招提寺第82世長老であり, 日本仏教への影響や随行者の活動などが詳述されている。
- (6) 東野治之 (2007)『遣唐使』岩波新書。鑑真渡日についての記述もある (129~140ページ)。
- (7) 浙江工商大学・日本文化研究所 (所長・王勇教授) の HP: <http://www.japanology.cn/> (日本語)。同氏の『産経』への投稿記事「日本に骨を埋めた鑑真~鑑真来日に関する若干の考察~」や「青春の遣唐使」(全8回)なども掲載されている。
- (8) 復旦大学の『復旦新聞網』(2009.9.26)。9月16日に実施した日中学生シンポジウムの模様を中心に「鑑真記念・逆渡航日中青年交流計画」の趣旨, 概要について国際関係学院の陳雲副教授が執筆。
- (9) 千田稔 (2008)『平城京遷都——女帝・皇后と「ヤマトの時代」』中公新書。6世紀の仏教公伝に始まり天皇制の強化, 朝鮮・隋唐との外交交渉, 東大寺大仏造営, 鑑真渡日にいたる古代史の壮大なドラマが描かれる。
- (10) 大庭脩, 王曉秋編 (1995)『歴史』(日中文化交流史叢書[1]), 大修館。日中研究者から見た日中交流史で, 内容は緻密。
- (11) 阿南・ヴァージニア・史代 (小池晴子訳) (2007)『円仁慈覚大師の足跡を訪ねて』ランダムハウス出版社。最後の遣唐使として中国にわたった天台宗の高僧・円仁の歩行した7500キロを著者も25年かけて踏破。美しい写真が多数入った紀行文。円仁訪中の約1世紀前に渡日した鑑真が住職だった揚州大明寺を著者が訪ねる話もでてくる。
- (12) 王慕民他 (2006)『寧波と日本経済文化交流史』(財)寧波旅日同郷会。
- (13) 山田昌夫 (2006)『鑑真は日中友好のかがり火』エコー出版。
- (14) 山本巖 (2007)『鑑真 転生への旅立ち』書肆侃侃房。